は重要な役割を果たします。両者の対話からは、ときに痛みを伴う深刻な質問が生まれることもあるでしょう。しかし、少なくともキリスト者からすれば、それはいたしかたのないことなのです。ユダヤ人からの興味深い問い掛けを、私たちは簡単に無視するべきではありません。そして自分たちこそ、贖罪を目指して神と共に苦闘するのだというキリスト者の主張が、ユダヤ人やその神との関係を犠牲にして実現されるものであってはならないのです。その一方で、ユダヤ人との対話を通じて、ユダヤ神学の奥深さとユダヤの伝統の豊かさを知ることは、一種の啓示、あるいはラバン・ガムリエルの言葉を借りるなら、「神から来た」体験と言えましょう。さらにこうした対話を通して、私達の新たなアイデンティティが形成されるかもしれません。キリスト教とユダヤ教が、「天のためになす議論」を戦わせる二つのコミュニティだとするのなら、私たちにはどんな奇跡を起こすことができるのか？それは神のみぞ知ることなのです。

ご清聴、誠にありがとうございました。

公開講演会

アラブ・イスラーム学院のアラビア語教育と遠隔教育の努力
—24年間を振り返って—

日　　時:2006年2月25日（土）　14:00−16:00
会　　場:同志社大学　今出川キャンパス　扶桑館マルチメディアルーム2
講　　師:ムハンマド・ハサン・アルジール博士
（イマーム・ムハンマド・イブン・サウード・イスラーム大学東京分校 アラブ・イスラーム学院長）
コメント:サミール・ヌーハ（同志社大学大学院神学研究科教授）

講演要旨

アルジール氏の講演は大きく3部に分かれた。1）導入として日本とイスラーム、サウディアラビアとの関係史、2）両者関係発展の大きな要素となるアラビア語を教育する、アラブ・イスラーム学院の活動についての紹介、3）最後にこの活動における将来的な可能性についてである。

同氏によれば、日本とイスラーム世界の関係は1801年に明治天皇がオスマン帝国へ遣使を送ったことが初めであるという。サウディアラビアと日本の関係も、19世紀初頭くらいから始まっており、1909年には日本人最初のマッカ巡礼となる山岡光太郎の旅行も行なわれている。また、政治的には1960年になってジェッダに日本大使館が開設され、両国関係を発展させることとなった。経済面では、特に商業関係が発展したが、1976年から技術協力機関としてサウディアラビアにJICAが開設されている。

アルジール氏は、そのような両国関係のさらなる発展のためには、媒体となる言語というものが大きな役割を占めると述べた。そうした中でアラブ・イスラーム学院は、1982年サウディアラビアから「日本への贈り物」として国王自身によってその創設がよびかけられた。現在では、2年間を1コース（レベル1から4まで）とした昼間クラス（1年間で週20時間の授業を15週実施）、短期集中のインテンシブコースなどを設けて、「生き生きとした」アラビア語の習得を目的として教育に取り組んでいる。また、近年インターネット上でアラブ・イスラーム文化、アラビア語教育に関する情報を配信するeラーニングにも力を入れている。この他にアラビア語の教育的出版物の発行、図書館の充実をはかり、学院の学生だけでなく在日アラブ人の子弟の教育にも配慮をするほか、学院外でのセミナーやシンポジウムなどでアラブ・イスラーム文化を広く宣伝する活動も行なっている。

アルジール氏は、こうした同学院の活動歴をふまえ、アラビア語教育の発展に関する将来的提言として「日本アラビア語学会（または協会）」の発足、大学等高等教育機関での「日本におけるアラビア語教育」会議の開催をよびかけ、講演をしめくくった。

コメンテーターとしてサミール・ヌーハ氏は、同じく日本におけるアラビア語教育に携わる立場から、同教育における将来的な抱負を述べた。

およそ60人以上の聴衆が来場し、アラビア語を習得する際の注意やアドバイスの求め

にアルジール氏が丁寧に回答するなど、活発な質疑応答がみられた。

（COE研究指導員　中村明日香）

プログラム

1. 挨拶:森　孝一（同志社大学大学院神学研究科教授）
2. 講演:ムハンマド・ハサン・アルジール博士
3. コメント:サミール・ヌーハ
4. 質疑応答

アラブ・イスラーム学院のアラビア語教育と遠隔教育の努力
—24年間を振り返って—

イマーム・ムハンマド・イブン・サウード・イスラーム大学東京分校アラブイスラーム学院長
ムハンマド・ハサン・アルジール
Muhammad Hassan Alzeer

最初にイスラーム教徒としての挨拶を申し上げたいと思います。それはアッラーの祝福と平安を皆様に送ることです。第二は、ただいまトリノの冬季オリンピックが行われておりますが、昨日、金メダルを日本人が女子フィギアでとられたということで、おめでとうございます。

本日、このように同志社大学に招聘していただき、CISMOR（一神教学際研究センター）でお話する機会を与えていただきまして、大変光栄に存じております。このセンターはさまざまな文明・文化を中立的な立場から多角的に研究していこうというお立場であると了解しております。さまざまな文化・文明については、コーランにもございますが、アッラーの神が人を創った時に男女という別をつくり、またさまざまな民族を創造してこられた、そしてこの世にいろいろなものが創造されたというのはアッラーの意図でございまして、その目的として「お互いに知り合うために違う人間をつくった」という言葉がコーランにございます。つまり知識を求めることを人の義務とされたのです。そのようにCISMORの趣旨に沿った言葉がコーランにもあるということをご紹介したいと思います。

先程、森センター長からありがたい言葉もありました。同様に皆様、お忙しい中、足を運んでいただいたことにもありがたく思うと同時に、うれしく思います。京都に初めて来ましたので、昨日到着して見せていただき、それも大変うれしく思っております。

最初に申し上げたいポイントは、アラブ・イスラームと日本の関係並びにサウジアラビアと日本との関係です。これについて、まとめてお話をいたします。

日本とイスラーム諸国との関係ですが、1891年、明治天皇のもとからイスタンブール（当時はオスマントルコ帝国でしたが）に使いが送られました。翌年、現地に到着しております。その当時、トルコ船が日本近海で台風のため沈没したという事件がありました。単に事件があったのみならず、遺族の方々を日本の一青年が支援しようという動きもあったということが背景にありまして、明治天皇からの使節がイスタンブールに行ったわけです。このことが双方の関係の始まりではないかと思います。その時以来、イスラーム諸国との日本の関係は順調に推移してきました。

次にサウジアラビアの国と日本との関係。これも長い歴史があります。1909年に山岡光太郎という日本人が初めてメッカへの巡礼を果たしたということが、そもそもの始まりだったと思います。その後、続々と続きまして、1924年、33年の二度に渡りまして田中逸平、さらには1935年、37年、38年と3回果たした鈴木剛のような、20世紀の前半、幾度も行かれたという方もございました。

今のような諸関係を基礎に外交関係について申しますと、1955年、日本とサウジアラビア間の外交関係が結ばれました。それに基づきまして土田豊大使も現地に行きましたが、58年、サウジアラビアの大使館が東京にでき、60年にはサウジアラビアのジェッダに日本大使館ができました。その後、サウジアラビアの王族からも言葉をいただいたかたちで、日本サウジアラビア協会も設立されました。

外交関係からその後はだんだん幅を広げてきて

おります。どういうふうに広げてきているか、いろいろな分野、例えば観光、青年交流、技術経済協力などです。日本側ではJICAという機関があることはご存じだと思いますが、そこを中心としたサウジアラビア向けの技術経済協力があり、また対話の機会を設けようということで、熱心に様々なシンポジウムなども行われています。東京にございます当学院でも、日サの対話を進めるためのシンポジウムを開催してきております。

その中で、アラビア語という言語、これが両国の交流の機軸になります。アラビア語と申しますと、まず出てくるのはコーラン、丁寧に言えば聖クルアーンというイスラームの啓典でございます。そこにはさまざまの聖なる言葉が入っております。また実に多くの教義、教えも含んでおります。同時に文化、一つの社会の規範を示すものでもございます。さらに言えば人間、人生についての深い理解であるとか、そもそも宇宙全体についての直接的な洞察も含んでおります。

今のような流れの中で、日本は比較的早くから大阪外大を中心にアラビア語の教育に着手してこられたことに、我々は注目しております。学問的、文化的なことに限らず、その背景としては商業的、外交的、一般的には中東に関心がある等、さまざまな理由があったと思いますが、日本は早くから着手されてきたと思います。他のヨーロッパの諸外国と比べましても、決して遅れをとっていないという印象でございます。

1949年に大阪外大で新しくスタートしたアラビア語学科が躍進しました。学生の数も増えてきています。毎年どんどん希望者が出ているという状況だと思います。東京にございます拓殖大学では、1959年にアラビア語がスタートしました。その当時は夜間コースでしたが、62年に昼間のコースに取り上げられ、それは一種の改革だったということですが、それ以来着実に伸びております。特にショックだったのは1970年代の石油危機。それを契機として大阪外大では一気に25名の学生が入り、他方、拓殖大学ではなんと70名になったと了解しています。

今述べました二つの大学に限るということではなく、その他多くの大学でも同様の兆候がございます。それには研究目的、知識文化的なことに対する関心等々、さまざまな背景があったかと思います。

以上のことを背景として、当方の学院が1982年に東京で創設されました。それについて若干詳しく述べさせていただきます。

日本には早くからアラビア語教育があったと承知しています。また私が存じています限り、60冊前後の本が日本で出版されています。当方の学院は毎日、生き生きとしたアラビア語教育を進めておりますが、それはサウジアラビアからの日本に対する贈り物であるといえるかと存じます。創設されたのは1982年（ヒジュラ暦では1398年）。創設について国王の指示が出されたことが背景にございました。それ以来、サウジアラビアから見てこの贈り物は相互の利益に資してきているのではないかと自負しています。

そういうことでスタートしたのはいいのですが、当初は何もなくて、借家に入っていました。徐々に整いまして、サウジアラビア自身の建物を作り直して、現在は東京の麻布にございます。

アラブ・イスラーム学院ではアラビア語教育と共に、広くアラブ・イスラームの文化を紹介していきたいということが大きな課題であります。幸いに多くの学生の入学志望も集まり、好評を得ていると、うれしく思っていますが、当初は当学院も夜間のコースだけでスタートしました。学生たちの支持を受けまして、日中のコースに拡大し、土曜、日曜の週末コースも設けております。これをもう少し詳しく述べます。

事務体制も整い、今のようにコースの種類も増え、さらにアラビア語教育のみならず、アラブ・イスラームに関する研究、翻訳事業の分野での出版事業にも手を伸ばしてきています。当学院の中にあります図書館には、アラブ・イスラームに関する基礎的な図書を揃えておりまして、学生の方々はもちろん、学院に直接関係なくとも広く研究者、市民の方々に公開され、活用していただいております。それと先程触れましたセミナー、シンポジウムも大いに活用して、アラブ・イスラームの紹介を図っていきたいと考えております。また、さまざまな出版物、本の形だけでなく、いろいろなものを提供してきています。

もう一つの手段はインターネット活用です。アラブ・イスラーム学院独自のサイト（http://www.aii-t.org.com/）で幅広く展開しております。アラビア語の教育とアラブ・イスラーム文化の紹介を目的としております。日本語サイトで皆様方にもご利用いただければと思います。世界のどこにいても、日本語を通じてこのサイトをご活用いただけるわけで、中近東にいる日本人の方々からもいろいろ声を寄せていただいています。個人的な利用、組織、大学にも活用していただいています。

現在13種類のホームページ上のプログラムを展開しています。できる限り、日本語のみならず、アラビア語も学べるようになっておりまして、アラビア語も画面に出てきます。英語も活用している部分があります。

先程申し上げたプログラムは合計13種類あります。たとえば「アラブ・カフェ」では、そこでアラビア語を勉強しようとする人への情報提供を図っています。また特に音楽、アラブの書道、アラブの単語をさまざまに出して、語源、由来を紹介するプログラムもございます。

いろいろなプログラムの追加の紹介ですが、「アラブマガジン」。これは半年ごとに筆者に交代していただき、比較的長い記事を書いていただくもの。一般向けには「アラブサイト」もございます。「イスラーム広場」では、イスラームを中心に紹介しております。日サ関係、サウジアラビアの観光を含む「サウジ記念館」のサイト。その他、人工衛星を介してサウジで行われた会議などを紹介するサイトもございます。日々更新されていますので、どうぞ一度ごらんください。「サウジ紀行」には、学生がサウジに行った時のこと、2002年、2003年にどういう旅行をしたかという記事もございます。人口衛星に関する会議に参加した人たちの声も出されています。

残りの三つのプログラムは「携帯電話利用のプログラム」です。日本語と英語の2言語で運営されています。日本の携帯システムにはまだアラビア語が載らないので、日本語、英語に絞って運営しています。さらに子ども向けのサイトで「アラビア村」もございまして、内容的には、日本人の子どもたちにサウジアラビア、アラブ・イスラームの文化、生活ぶりを紹介したいということでございます。

なお最後になりましたが、今日のタイトルにもあります「eラーニング」、遠隔教育を通じてアラビア語を教育する番組を運営しています。

別の分野になりますが、当学院が引き続き重視していますのは、アカデミックなレベルの交流です。対外関係一般にも留意してきています。

さらに分野としては、広い意味では日本サウジの関係を側面支援したいということです。サウジアラビアとの交流に関する外務省、環境省の仕事でもお手伝いしてきています。また先般、長野県で冬季パラリンピックかありました。その時にかなりの数のアラブの選手が来まして、アラビア語要員がいるということで、当学院から学生を募りまして、多数応援に行った次第です。

次は、メディアとの関係も重視しておりまして、NHKのテレビ・ラジオのアラビア語講座に全面的に協力してきております。

その他の活動としては、東京にはサウジアラビア人他、アラブ人が住んでおりますので、その家族を含めて彼らへの奉仕活動、協力活動を展開しています。礼拝の場を提供したり、教育面でも支援しています。

次に「第2語学としての教育」についてであります。第2語学としてのアラビア語教育にはさまざまな困難と問題点があります。その問題点は発音、書き方、文字、文体、口語と文語の関係。そもそも第

2語学となると、学習される方の年齢など、さまざまにございます。

最善の学習方法、第2語学をどうやって教えたらいいか。世界のどの語学であれ、言語学者がさまざまに提案しています。15の方法があるという複雑な議論もあるようですが、当学院では議論、提案を吸収しつつ、第2語学であるアラビア語を最善の形で提供したいと考えております。

申すまでもありませんが、言葉の習得、学習は一つの大変な知識、学問分野でして、そのための言語学、社会言語学、心理言語学、教育言語学などさまざまあるかと思います。このような特定の言葉を習得し、習練して実際に使えるようにしようということが願いですが、その教育の仕方により、その願望が近くもなり、遠くもなり、やさしくもなり、難しくもなるものだと思います。そのためには狭い意味での教育方法のみならず、学生、教育者両方の環境、生活全体の諸関係も教育方法に勘案していくことが大切かと思います。

当学院ではそのようなことを考えながら、さまざまなプログラムを実施しています。特に力が入るのは昼間のコース、2年間を四つのレベルにわけて進めます。15週間を前期、後期も15週間。1週間に20時間の授業を当てています。加えて補足的なコースとして、アラビア語を教える教師への研修コースも設けています。春と夏の集中コースも別途つくっています。

また、毎年、学生たちの習得してきたものを競わせようという意図から、「アラビア語オリッピック」というのを、年1回実施します。その分野を四つ設けています。アラビア語のタイピング、スピーチコンテスト、書道、作文の分野で競うことで、競争意識も植えつけようと思っています。

今申し上げましたさまざまなコースは、当学院を中心に、サウジアラビアの本部であるイマーム大学のアラビア語学科とも提携しまして作成した教科書を「東京シリーズ」と呼んでいますが、その教科書をベースに展開しています。尽力しておりますが、まだレベル1とレベル2までの東京シリーズの教科書が整ったところです。残るレベルについては、執筆、編纂、検討を続けております。対象として想定していますのは、当然、当学院の学生ですが、それに限るのではなく、その他の方々、アラビア語を勉強したいという人たちが自由に入手できる形で作っていきたいと思います。先ほど申しましたように、1週間20時間をあてて勉強していくと、四つのレベルを通すと合計1,200時間に相当しますが、言葉を習得するのに加えまして、アラブ・イスラームの文化的伝統に基づく生活態度、道徳観念をお伝えしたいと考えています。

どのレベルを通じましても、共通しているのは4側面です。話し言葉、書き言葉、読む、文法がございます。これは各レベル共通していますが、レベル1と2については、いきなり文法ばかりで頭をゴシゴシするのはどうかと、アラビア語を読む中で文法事項を吸収するという、新しい独特の手法で、文法事項も勉強してもらう形をとっています。レベル3、4は、話し、書く、読む、文法の四つの側面に分けて、詳細に教科書で学ぶことにしております。録音をしてそれを学生が自由に聴ける準備もしています。

録音のことを敷衍いたしますと、CD-ROMの形で提供するものもございます。それには、学習、プラス、日頃やってきたことに対する自己評価、どのくらい進んでいるかをチェックできるシステムも入っています。通常の辞書、本の形もありますが、画面を使って絵で見るような辞書もございます。CDもあり、テープ、インターネットのサイトもございます。当学院の中にありますランゲージ・ラボを駆使する施設がございます。

私の後ろの画面に出ていますのは、インターネット上のアラブ・イスラーム学院のサイトのトップページです。いろいろなプログラムがございます。インターネット活用は、一つの知識を得るのに、ある意味で時間の短縮にもなっている。さらには学院に来られない人たち、日本の国外にいる人たちも活用できる大変なメリットがあると思いますので、今後とも引き続き学院として重視して継続していきたいと思っております。

ちょっと専門的なことですが、レベル1については、300ページの絵による明示も含めて、ランゲージ・ラボを活用して学習できるシステムは完成しております。レベル1については教科書がなくてもランゲージ・ラボで学べる。その中にはJAVAスクリプトとか最近のインターネット、コンピュータの技術が駆使されています。これを通じて我々としては学院の外におられる方々との関係を大いに構築していきたいという願いでございます。

日本とサウジアラビア、広くはアラブ・イスラームとの関係につきましては、今までのような努力を今後とも継続していきたいと願うばかりでございますが、それは一つには文化的な刺激になるでしょうし、当然ながら経済的な相互の利益にも、広く言えば、つながるということで、積極的を意義を見いだしていることにほかなりません。

そこで最後に若干、提言めいたことをさせていただきます。第1点は、日本にまだないかと存じますが、「日本アラビア語協会」、あるいは「日本アラビア語学会」の創設を訴えたいと思います。

第2点は、アラビア語の教育については当学院の考え方は申し述べた通りでございますが、未ださまざまなやり方が実施されているのが現実かと存じますので、日本のそういう方面の関係の大学などの組織を中心として、会議の形で「日本におけるアラビア語教育のあり方はどうあるべきか」という議論、検討を進められる会議をオーガナイズされることを、ぜひ提言したいと思います。

最後の提言ですが、いずれかの日本の関係団体、組織を中心として、日本語とアラビア語両方の言葉で、ぜひとも日本とサウジアラビア、日本とイスラームの諸関係、相互の今までの交流、今後の交流を中心としたテーマで、包括的に本の形でぜひ出されてはどうか。それをベースに政界、財界、大学関係、メディアにも広く配って、世の中の意識を目覚めさせる、さらに深めていただくという一つの基礎的な出版物を出されるよう、ぜひ提言したいと思います。

ご静聴ありがとうございました。

同志社大学講演要旨　2006年2月25日

「アラブ　イスラーム学院のアラビア語教育と遠隔教育の努力
—24年間(1982－2005)を振り返って」

教授·博士　ムハンマド·ビン·ハサン·アルジール

1. 初めに
ア. アラブ·イスラームと日本の関係
イ. サウジアラビアと日本の関係
ウ. 関係強化と相互理解のためのアラビア語の重要性
エ. 日本のアラビア語教育について

2. アラブ イスラーム学院紹介
ア. 目的と発展
イ. 試みの進展

3. 第二語学としての教育
ア. 困難と問題点
イ. 最善の学習方法

4. 当学院の試み
ア. 当学院のプログラム
イ. 当学院の方法　—『東京シリーズ』
- 同シリーズの目的
- 対象者
- 同シリーズへの充当時間
- 文化的内容
- 同シリーズの内容
  - 教科書と水準
  - 学習手段
  - 教授の仕方
  - 当学院のホーム·ページ

5. 最後に ― コメントと助言